

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を

2025年9月1日・2日 教役者フェローシップ（軽井沢グレースキャンプ場にて）



「だれを、わたしは遣わそう……ここに私がおります。私を遣わしてください」（イザヤ六章八節）

神の呼びかけに応えたイザヤですが、二つの疑問があります。①彼は既に神に呼ばれているのに（一～五章の時点で預言をしている）なぜ再び呼ばれたのでしょうか？②再度神に呼ばれたときの主を見た出来事と、自分が減んでしまうと思うほどに罪を自覚した出来事は何を意味しているのでしょうか？（六章一～七節）

この疑問を解く鍵は、ウジヤ王が死んだ年にイザヤが召された点にあります。16歳で王となったウジヤは、主の目になうことを行い、主は国を豊かに繁栄させました（Ⅱ歴二十六章一～十五節）。イザヤはこの王のそばで仕えていた預言者でした（同二十二節）。国もイザヤもその祝福のうちに過ぎました。しかし、ウジヤは強くなったことで心が高ぶり、主の信頼を裏切りました。彼は神に打たれ、ツアラアトに冒され、死にました（同十六～二十一節）。数年後にはアッシリアによる周辺国の侵略が始まります。国もイザヤも王の死を悲しみ、動揺したでしょう。ウジヤによって与えられた安全に拠り頼んでいたのであれば尚更です。今イザヤは、高く上げられた御座に着いておられる主を見えています（イザヤ六章一節）。ウジヤが王座に着いていた時は主が見えなかったのでしょう。信仰者が自分の頼りにしていたものを失った時、天の視点を持つ機会となります。イザヤは、聖であり、至高と尊厳に満ちたお方を見えています。ヨハネは、そのイザヤを「イエスの栄光を見た」と述べています（ヨハネ十二章三十九節、四十一節）。そのような主を見た者の姿が「ああ、私は滅んでしまう……」です。イザヤは民の不信仰を責めていましたが、自分がさばかれるべき存在だと悟ったのです。彼は主を見た経験だけでなく、罪が赦される経験をしました。その後には再召命の御声がかかるのです。「私を遣わしてください」と応えたイザヤは、改めて神本意のメッセージを語る者として遣わされます。神の召しを改めて考えさせられます。自分が救われ難い罪人であること、神の恵みがあつて今の自分があること、この気づきには痛みが伴いますが、召された者として祝福であることを教えられます。



信仰の再確認

～真理のみことばをまっすぐ解き明かす～

野木聖書浸礼教会
牧師：浜田 光人

はじめに

9月1日、2日、グレースキャン
プ場で教役者フェローシップが行わ
れました。テーマは「信仰の再確認
～真理のみことばをまっすぐ解き明
かす～」です。「現代」という時代
の対応の苦慮、新たな開拓教会を生
み出す難しさ、伝道者自身の問題、
また独立教会も困難さを覚える現状
は否定できません。これらの問題に
対してどのように向き合い、神のこ
とばをまっすぐに解き明かしていく
のかという主旨で開催しました。今
回、小山聖書浸礼教会及び野木聖書
浸礼教会の協力牧師である浜田光人
師に語っていただきました。以下に
その内容をまとめました。（井口）

1 時代という障壁（生かされ ている時代を考える）

（1）聖書のことばが示す終末の時代
聖書に基づくならば「終わりの日
には困難な時代が来ることを、承知
して」（Ⅱテモテ三章一節）おこな
ければならない。その困難な内容は
クリスチャンたちに起こること、
終わりの日の悪化した社会状況の影
響を受けて「自分だけを愛し、金銭
を愛し：神よりも快楽を愛する者に
なる」。表面的な信仰でしかないた
め、健全な教えに耐えられない。益
々真理から耳を背けて作り話に逸れ

（2）神のことばを正しく生活に 適用できない

伝道者が神のことばを正しく適用
できないために、働きの緊張感が切
れてしまい、伝道者としての生活に
疲れてしまう。

3 信仰の再確認 7つの提案

ここで扱うことは教理的な事柄で
はない。以下の7つの提案から信仰
の再確認をし、みことばをまっすぐ
に解き明かすことに努める。

（1）成果主義から忠実度主義へ ～自己評価に関すること～

「成功か失敗か」の世の評価基準
に基づいて「何人救われて、どれだ
け大きな教会を形成したか」という
成果主義を無意識のうちに持ち続け
ると、成果が上がらない場合、「自
分はダメだ」に陥る。成果で判断し
ないで、神が与えて下さった召しに
忠実かどうかで判断するよう、自分
の中の評価基準を入れ替える必要が
ある（マタイ二十五章十四～三十節
のタラントのたとえ、ルカ十九章十
一～二十七節のミナのたとえを参考
）。聖書の判断基準であれば、人の
評価を気にする必要がなくなる。

て行く（Ⅱテモテ四章三・四節）。
以上のように、終わりの日にはクリ
スト教会に悲しむべきことが起こる
と、聖書が警告していることをしっ
かりと受け止め、自分の教会や交わ
りのある諸教会が、預言の通りにな
らないように努めるべきである。「
しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救わ
れます」（マタイ二四章十三節）「
時が良くても悪くてもしつかりやり
なさい。忍耐の限りを尽くして：、
あなたはどんな場合にも慎んで、苦
難に耐え、伝道者の働きをなし、自
分の務めを十分に果たしなさい」（
Ⅱテモテ四章二・五節）

（2）現代という時代（ポストモダン）

①人々の共通の基準がなく、
各自が基準

人々の共通の基準がなく、各自が
基準となり、互いに相手の基準を否
定しないことを主張する。自己中心
的な言動が強まる。キリスト教信仰
において、「罪の理解、悔い改め、
神への服従」などが受け難くなる。
救われたとしても、内側にある「自
分の基準で生きることが正しい」と
いう古い人を捨てなければ成長はな
い（エペソ四章二十二節）。「それ
は牧師の考えであり、解釈でしょ。
僕はそう思わない」と主張する人に
どう宣教すべきか。



（2）「神のために働く」と 「神とともに働く」

「神のために働く」は、働く自分
と働きそのものに目が向く（自意識
）。「神とともに働く」は、キリス
トを意識する（マタイ十一章二十八
・二十九節）。自分を捨てて、イエ
スに従う人の目は、常にイエスに注
がれ、イエスとともにいることで安
息を味わう。

（3）ありのままの自分で生きる

現実の自分（例…話すことが苦手
背が低い、内向的性格、人付き合い
が苦手…）を受け入れられない。こ
れは不健全なセルフイメージであり
神がその人を造られたままを受け入
れられないことになる。神が自分に
与えられたものが「私」である。そ
れを丸ごと受け入れて、肯定するこ
とが大切である。「あなたの隣人を
自分自身のように愛しなさい：」（
マタイ二十二章三十九節）

② 社会の思想が益々聖書から 離れて行く

社会が聖書の基準から離れて行く
時、世の教えに同調するクリスチャ
ンに対して、どのように教えるべき
か。聖書の教えをはっきりと教える
べきか否か：教会が聖書の教えを部
分的に語らなくなるかもしれない。

③ 深くものを考えない 感覚で生きる時代

本をスマホやタブレットで読むの
と、印刷された物を読むのでは、
思考力、読解力、想像力（相手の心
情など）に差が出るのがデータ化
されている。実際に聖書をスマホ等
で読む場合、文脈から読み込むこと
は難しい。感覚も大切だが、信仰は
神のことばが基盤のため、神のこと

ばそのものを深く考え、生活に適用
していくことが大切である。

④ 訓練、しつけをしない時代

幼少期に親からしつけを受けず、
好き勝手に生きる大人が多くなる。
そういう人が教会に訪れても、自分
の正しさを主張し、罪が益々わから
ない状態が生じる。

：以上のような、時代という障壁が
教会形成を難しくする。

2 信仰の再確認まっすぐに 解き明かせない原因

時代という障壁を承知した上で、
信仰の再確認をする。まず、真理の
みことばをまっすぐに解き明かすこ
とができない原因を挙げる。

（1）恐れ

●みことばをまっすぐに解き明かす
と、教会員をつまづかせてしまうか
もしれない。「厳し過ぎる」という
評価がされ、「今の時代では無理だ
」と言われるのではという恐れ。

●みことばをまっすぐに解き明かす
と、教会外から批判されるという恐
れ。（例…同性愛の問題など）



(4) 神との関係の確立について →キリストと二つになること→

① 確立しているもの

イエスは私の救い主、私の主。イエスはどんな時にも信頼できる方。イエスはいつも私とともにいる（相互内住）。

② 確立しているのか？

● イエスから豊かないのちを得ているか？

ヨハネ十章十節「わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです」豊かないのちとは、霊が生き生きとして輝いている状態である。

● キリストと一つとなる

・ガラテヤ二章二十節「もはや私が生きているのではない、キリストが私のうちに生きておられる」

● エペソ四章十三節「キリストの満ち満ちた身丈にまで達する」

・キリストと一つとなるために自分を明け渡し、信じて祈り求め、主を待ち望む。後は神が成してくださること、人は何もできない。その結果、その人に聖霊と力が働く。また主のおからだと一致し、聖潔が生じる。



瀬戸聖書バプテスト教会
濱谷 勉

退くわけにはいかない

1. 行こう

教役者フェローシップの案内をいただいた瞬間、「行かねばならぬ」と思ったのです。押し出されたのです。理由ですか。集会のテーマ、講師の先生（そのユニークな働きと先生の話は初めて）、久しぶりのキャンプ場、同労者たちとの出会い等々からです。しか

(5) 「苦難に耐えられるか」について

エリヤは主によって勝利をおさめたにもかかわらず、イゼベルの脅かしによって死を願うほど心身が疲れてしまった（Ⅰ列王十八章）。エリヤでも苦難に耐えられず、逃れようとした（Ⅰ列王十九章）。主の約束に「あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていくでございます」（Ⅰコリント十章十三節）。エリヤの場合、御使いとパン菓子と水が備えられた。人間の肉体も心も弱いことを認識すること、神の助けを切実に求めることが必要である。友の助けも必要。例えば、自分の弱さを話すことのできる伝道者の友。

(6) 「霊に燃えているか」について

① 召しと覚悟を思い出す

神の働きには命をささげることが求められた。代価を払って買い取られた私たちのからだは、もはや自分自身のものではない（Ⅰコリント六章十九節）。だから、伝道者は主の働きのために、すべてをささげる決心をした（ルカ十四章二十六節）。このような伝道者の原点に、何度も立ち返る必要がある。

し、距離があります。一人で行けないこともないのですが迷いました。なんと助け船が出たのです。正田先生の車に同乗できることになりました。問題解決。同乗の先生たちと沢山の会話。感謝しました。

2. 終わりの時代

大きなテーマは「信仰の再確認」でした。第一集会の「時代という障壁」（生かされている時代を考える）で先ず考えさせられました。もしかして自分はどうでもない時代に生きていて、何か的外れな伝道をしているのではないかと言う恐れを感じたのです。終末と言うことは意識してきたつもりですが、自分が思っていた以上に困難な時代に入っているのではないかと。第二テモテ三章一―二節の御言葉が取り上げられ、信者の変質について教えられました。深くものを考えない、感覚で



② 霊に燃えることが必須

自分が献身した時に戻り、今一度霊に燃えることが大切である（黙示録二章四・五節）。

(7) 神の召しによる働きの喜びを持つ

一人を救いに導く喜びと価値を知ること。「…この兄弟のためにも、キリストは死んでくださった」（Ⅰコリント八章十一節）、「一人の罪人が悔い改めるなら…大きな喜びが天にある」（ルカ十五章七―十節）このように、神のお考えは、私たちが考える以上に救いを大切にされている。この働きに召されていることを自覚し、一人の救いを大いに喜ぶべきである。たった一人しか救いに導くことが出来なかったとしても、その一人が神の偉大な働き人になるかもしれない。であるから、一人を導いた人は、神の国建設のために貢献していることを覚えよう。「成果が上がらないから、やめさせる」と決して神は言わない。なぜなら、「神の賜物と召命は、取り消されることがないから」（ローマ十一章二十九節）。

4

伝道者が助け合う(提案)

神は一人で働けとは言わない。イエスは、宣教にあたり弟子を二人一

生きる人間。訓練のしにくい時代との指摘。SNSが幅をきかせる時代。恐ろしい時代を迎えていると改めて実感しました。

3. まっすぐに解き明かす

「信仰の再確認」（まっすぐに説き明かせない原因）の項目では実際の説教についての助言でした。私は特に「恐れ」ということに感じ入りました。何を恐れるのか。信者の目を恐れ、世間の目を恐れる自分。やっかいです。これはどうしても乗り越えて行かなければならない戦いと再確認しました。「信仰の再確認」（7つの提案）の項目も、多くの有益な示唆がありました。その中で「神のために働く」と「神と共に働く」の違いに、なるほどと思いました。「神のために働く」は良さそうですが、自分が前面に出してしまうのではないか。「神と共に働く」の方が神の栄光につながるのではないかと指摘。至言です。

4. どうするのか

鋭い指摘になるほどとうなずき、且つうろたえました。普通はお話を聞いて「恵まれました」と言うべきですがそんな言葉は出てこず、「重い話でしたね」と黙り込むのみでした。なんとか聞きしたことを消化して、御言葉をまっすぐ解き明かせる人間になりたいものです。浜田先生、良い仕事をされました。行って良かった。聞けて

組で遣わした（マルコ六章七節）。神は助け合うために仲間を備えてくださっている。伝道者が一つの教会で孤立することなく、助け合うことが必要。例えば、(1) チーム（二家族）で開拓伝道を行う。(2) 近隣教会が他教会の伝道支援に手弁当で3ヶ月ほど支援に行く。(3) 先輩牧師（引退した牧師）が、グレースキャンプ場を利用して、1週間～3ヶ月の期間に、必要な伝道者たちにカウンセリング、祈り、聖書の学び等で、霊と心のケアを行う。独りで抱え込んで悩むよりも、助けを求めること、頼ることを行って良いのではないか。そういうシステムを群れ全体で作ってみてはどうか。



良かった。

仁戸名聖書バプテスト教会
小林 秀夫

今回、教役者フェローシップに参加して、今の自分にとってちょうど必要なことを教えられ、感謝でした。

浜田先生は「最近、自分の牧会がうまくいかないと感じて、疲れを覚え、自信を失っている牧師が少なくない」と指摘され、それに対する答えの一つとして、まず「目に見える結果だけで自分を評価するのではなく、主はその人の忠実さを評価されることに目を向けるべきだ」と教えて下さいました。また先生は、オズワルド・チェンバーズの「重要なことは、神のために働いているかではなく、神と共に働いているかである。神と共に働く者は、キリストに目を留め、キリストが先頭であり、自分はそのあとに従って手伝う者にすぎないと意識して働くべきだ」という趣旨の言葉を引用されました。実は、私も最近、同じような意味のことを教えられていました。私は、自分の最善を尽くして働いていれば、結果はどうであろうと気落ちする必要はないということとは理解していました。しかし、長い間の牧会経験を通して色々と経験と知識が増したと思っ、知らないうちに高ぶっており、自分の力や知

恵だけで働こうとしていて、主が私と共におられ、私を助けようとして下さっている事を忘れていたことに気が付かせられたのでした。また先生は、アンドリュー・マレーの「神は『今の教会に聖霊の力がわずかにしか働いていない』と見ておられる」という言葉も引用されました。それは、聖霊の力を祈り求めようとしなからです。さらに、ガラテヤ二章二〇節の「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられる」という御言葉を引用されましたが、その御言葉によって、私は、私の内に生きておられ、私を意のままに用いようとされている主イエスに自分を明け渡して生きることの重要性を改めて思い起こされたのでした。このフェローシップに参加できて、こうした重要なことを改めて教えられたことを、とても感謝しております。



仁戸名聖書バプテスト教会
小林 太秀

「終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。」

Ⅱ テモテ三章一節

第一集会の冒頭で浜田先生は、この御言葉から語られました。まず私たちが自覚しなければならないのは、私たちが「困難な時代」に生かされているという事実です。なぜ困難な時代なのかと言えば、二節以降にあるように人々の墮落がますます深刻になっていくからです。伝道者はそのような状態にある人々と向き合っていかなければなりません。

「困難な時代に生かされている」という自覚は、うまくいかないことを時代のせいにするという意味ではありません。むしろ困難な時代だからこそ、より慎重に、そして主にあって強められながら働いていく必要があるということをお教えています。

私はこれまで、「今が困難な時代である」という認識をほとんど持っていませんでした。そのため、危機感や慎重さが欠けており、結果として非常に不十分な働きしかできていなかったことを、このメッセージの最初の語りかけを通して示され、大きな衝撃を受け



ました。

このように、今回の教役者フェローシップは、冒頭から御言葉の鋭い語りかけに満ちた非常に刺激的な集まりでした。二日間を通して行われたのは、二回の集会と、その後の分かち合いのみで、特にレクリエーションのようなプログラムがあったわけではありません。しかし、語弊を恐れずに言えば、それだけでも十分に「楽しい」集まりでした。なぜなら非常に豊かな霊的恵みをいただくことができたからです。御言葉によって養われるとはどういうことなのか、その素晴らしさを改めて実感することができました。

実は私は、直前まで教役者フェローシップに参加するかどうか迷っていました。ちょうど大きな問題に直面しており、精神的にもスケジュール的にも余裕がなかったからです。それでも最終的に参加を決めたのは、「だからこ



若葉聖書バプテスト教会
鈴木 しのぶ

教役者フェローシップでの浜田光人師の御言葉の説教、国内宣教委員の先生方やキャンプ場の谷井悟先生、千賀子先生のお働きに心から感謝いたしました。私は教役者フェローシップの二日目に台湾に戻る予定でした。しかし、派遣教会の牧師スミス師からフェローシップでの交わりの大切さを指摘していただきました。また、神学校時代にある先生が、ご自分の師から「交わりは何があっても保ちなさい」と教えられたと、繰り返しお話しくださったことを思い出しました。台湾ではなかなか交わりが持てず、また次にファローロで帰国する時に教役者フェローシップがあるとは限らないことを鑑み、飛行機をキャンセルして参加しました。交わりの機会は、逃したくない貴重なものです。

私は浜田光人師の説教から、福音伝道が困難である現代の伝道において、主に頼り、時に仲間を頼り、また弱っている同労者の回復を支えることを教えていただきました。また、私は第一集会にて証をする機会をいただきました。依頼された証のテーマは「弱さの中で信仰を再確認する」という難しいものでした。私は、たとえ姉妹方の集まりで覚える親しみとは異なる場にお

そ今、主を求めて霊的に強められる必要がある」と思ったからです。そしてもう一つの大きな理由は、参加サポートの厚さでした。グレースキャンプ場まで車で行くとなると、時間的にも経済的にも負担が大きくなりますが、今回は交通費補助があったため、新幹線で移動することができました。このサポートの厚さが、迷っていた私の背中を大いに押してくれました。国内宣教委員会がこの教役者フェローシップに重荷を持ってもらえるのは、「何とかして伝道者を励まし、力づけたい」という熱い思いがあるからだといいました。近年、さまざまな事情で伝道者としての働きが続けることが困難になっている先生方が増えていると聞きます。そのような課題から目をそらさず互いに励まし合うためにこの集まりが持たれているのだそうです。

元気がない時には、そうした集まりに参加する気になれないものですが、私は今回の経験を通して、「元気がない時こそ」参加することで、むしろ元気な時以上に大きな恵みをいただけるのだと感じました。このフェロシップの中には、誰一人として人を裁くような雰囲気はなく、むしろ「泣く者と共に泣く」真実な交わりがありました。その中で、安心して自分の内側を分かち合うことができました。

御言葉と交わりの素晴らしさを心から味わうことができたことを感謝しています。これから、この教役者フェ

いてでも、先生方を前に緊張しながらであっても、自分の弱さから主の勝利を証することできるのだと体験しました。先に弱さから証ができたからでしょうか、後の日に弱ったら、主にも同労者にも頼ればよいと思うようになりました。台湾に戻り、私の弱さは変わらないのに、以前より積極的に人と話しをするようになりました。今後、もっと弱くなれば、もっと主に頼り、仲間に頼ります。

今回、私は教役者フェローシップに参加して、神学校やキャンプなどの交わりの中で育てていただいたことを改めて感謝しました。また、日頃からの交わりを大切にし、また安心できる交わりを継承する必要性も覚ええました。このような機会をいただいたことを、主に感謝いたします。



ローシップがますます用いられ、多くの先生方が励まされることをお祈りしています。



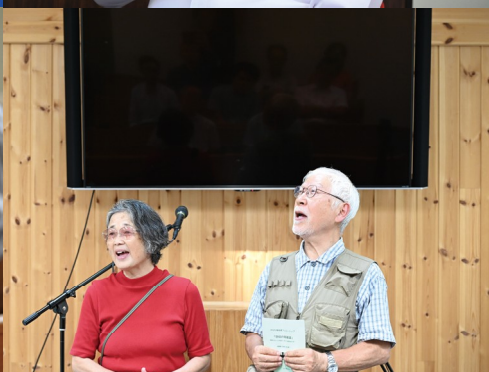
若葉聖書バプテスト教会 ジェームス・スミス

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタイ十八章二〇節)

私にとって、キリスト・イエスにある兄弟たちとの交わりはクリスチャンであることの最大の祝福の一つです。ですから、JBBF国内宣教委員会が主催する「教役者フェローシップ」のチラシを見た時、すぐに参加したいと思いました。キャンプ場に到着すると井口師をはじめ、参加者の方々と温かく迎えられました。このフェローシップの講師である浜田光人師は、互いに助け合うこと、特に精神的に苦しんでいる人々を助け合うことについて、熱心に語ってくださいました。説教のすべてを理解することはできませんでしたが、多くを理解できたことに感謝しました。そして、浜田牧師と牧師の方々との個人的な交わりも楽しめました。何年也会っていないかった友人と実際に会って交わりを持つことができました。これは大きな祝福でした。海外から来た宣教師として、日本の牧師や教役者の方々との交わりは非常に重要です。私は日本に来て20年近くになり

ますが、日本の牧師の方々との交わりは、特に落ち込んでいる時に励みになってきました。この交わりの時間と、日本での数々の交わりに招いていただいたことを主に感謝しています。毎年このフェローシップに参加できるかどうかは分かりませんが、参加できればと思っています。



【お知らせ】
上田晃先生の連載「イエス・キリストの恩寵の中で」は今号休載です。次号(97号)をお楽しみに！